

伊藤信義先生と「智瑤基金」の由来*

甲状腺外科研究会

高井新一郎

智瑤基金と甲状腺外科研究会の活動

甲状腺外科研究会会長
信州大学名誉教授

飯田 太

甲状腺外科研究会に智瑤基金が設立されて二十数年が経過し、本基金の運営はほぼ軌道に乗った。この度、智瑤基金と関係の深い大阪の地で、甲状腺外科研究会が開催される機会に、本会における基金の成立のいきさつと意義を総括し、会員の皆様の御理解を深め、同時に寄贈者故伊藤信義氏の御遺志を顕彰する催しが提案された。智瑤基金は、最初、伊藤信義氏が大阪大学講師（のち教授）高井新一郎博士に相談されたことに始まり、両氏のご尽力により成立の運びとなったものである。したがって、高井博士は当時のいきさつを最もよくご承知であるので、計画の実施のすべてを博士にお願いした。

この基金の活動は本研究会の学術集会の開催と、甲状腺悪性腫瘍の登録事業に対する支援が主なものである。とくに、後者については、当初、乏しい資金で細々と始められた活動が、本基金の援助によって、著しく活性化され、充実した登録事業に発展した。この事業によって得られつつある知見は本邦における甲状腺癌の実態を反映するものとして、内外に認められるまでになった。本会における基金の貢献は測り知れないほど大きなもので、寄贈者故伊藤信義氏および御一族の方々に心から御礼申し上げる。

はじめに

外科的治療を要する甲状腺の疾患——とくに甲状腺癌の診断法・治療法の進歩と、その普及に「甲状腺外科研究会（旧称 甲状腺外科検討会）」が大きな役割を果たしたことはいうまでもない。また、この研究会の活動の一部が智瑤基金によって支えられてきたことも会員の多くの方がご存じであろう。

しかし、この基金の由来を知る会員は今やごく少数

*本稿は2000年10月19~20日に大阪市で開催された第33回甲状腺外科研究会における特別展示を、世話人会の承認を得て本誌に投稿したものである。展示したポスターをほぼそのままの形で文章にしたが、手紙、シラサギの写真、写真集、論文別冊などは図や文献として引用することとした。

別冊請求先：〒390-8621 長野県松本市旭3-1-1 信州大学
医学部第2外科学教室内 甲状腺外科研究会事務局

著者連絡先：〒663-8162 兵庫県西宮市甲子園砂田町2-1



図1. 伊藤信義先生

になってしまった。この基金は、大阪市の伊藤信義先生（図1）から本会に頂いたご寄付をもとに、甲状腺癌研究に役立てることを目的に設立されたものである。2000年に第33回甲状腺外科研究会が中尾量保当番世話人のお世話で大阪において開催されるのを機会に、またこの年がちょうど伊藤信義先生が逝去されてから10年目に当たるので、故伊藤信義先生の横顔と「智瑤基金」の由来を展示して、できるだけ多くの会員諸氏に知っていただきたいと考えた。

発端

1977年7月初旬に大阪市旭区の伊藤信義先生から、大阪大学医学部第2外科（当時）の高井新一郎あてに手紙が届いた（図2）。手紙には、大阪医科大学一般消化器外科の安井廣明助教授（当時）の紹介状が添えられていた。思うに1976年秋に神前五郎先生（当時、阪大第2外科教授）を当番世話人として第9回甲状腺外科検討会が大阪で行われたせいで、阪大第2外科甲状腺グループのチーフであった高井を御紹介下さったのであろう。

伊藤信義先生のお手紙には、小さめの几帳面な文字で、御母堂様の臨床経過が詳しく述べられていた。内容を要約すると：

a) 伊藤先生の母上が甲状腺癌の肺転移のためにお亡くなりになったこと。

b) 1971年10月頃から甲状腺の腫大に気づいておられたこと。

いくつかの医療機関で診察を受けられ、それぞれの医療機関で多少意見の相違はあったが、最終的には¹³¹Iシンチグラフィではっきりしたcold areaが認められなかったことから「慢性甲状腺炎」と診断された。約1年半甲状腺末の投与を続け、腫瘍もやや縮小したので以後すっかり忘れていたこと（1971年はもちろん、1977年でさえ、穿刺吸引細胞診はまだ普及しておらず、また超音波エコー検査装置も未発達であったことを思えば、最初の段階で誤診されたのもやむを得ないともいえよう）。

c) 1977年2月下旬頃から、感冒様症状（軽度の発熱、咳）あり。漸次悪化。4月25日胸部X線像にて全肺野に霜降り状の小斑点陰影あり。呼吸困難を生じ、1977年4月28日に逝去されたこと（享年77歳）。

d) あとから見れば、1958年11月の写真で右眼裂が軽度で狭小で、ホルネル症候群と思われることが記されており、この経過についていろいろと客観的に医学的考察がなされていた。

そして、医師でありながら誤診に気づかず治療の機会を逸したことを非常に悔やんでおられることを述べられた上で、次のような質問を書いてこられた：

1) 甲状腺癌発病時期。2) 根治手術可能性。3) 術後愁訴。4) 予後。5) 手術をしたとすれば、癌細胞の血中散布の可能性。

（今回の展示の準備中に分かったことだが、伊藤信義先生は同様な趣旨の質問を日本医事新報誌に寄せられ、これに対して牧内正夫先生が回答しておられる。)

この手紙を頂いて2~3日後に伊藤信義先生に阪大病院の病棟にお出で頂き、高井から上記のご質問にできる限りお答えした。

最初にお会いした時には顔色も悪く、本当に自責の念に耐えかねておられるようにお見受けした。しかしゆっくりとお話をお聞きし、また先生のご質問にお答えしているうちに、先生のお悩みが幾分かでも緩和されたかのように思われた。

こういう話のあとで「甲状腺癌の研究に役立てたいので基金を寄付したい。ついては寄付先として適当なところがあれば紹介して欲しい」旨お申し出があった。私は、癌治療学会や外科学会なども思い浮かべた

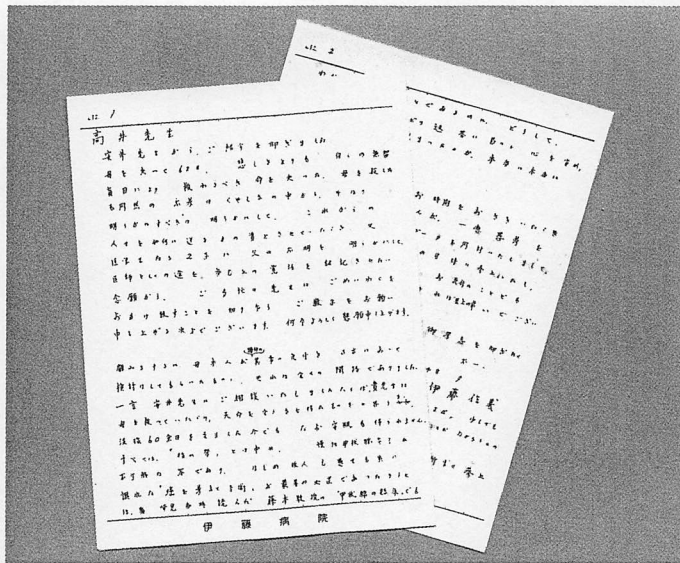


図2. 伊藤信義先生からの最初の手紙

が、これらはマンモス学会であり、甲状腺専門ではないことから、本会がもっとも適当と考えた。

智瑤基金の成立に至るまで

以上の申し出を受け、神前先生（本会世話人の1人）と相談の上、降旗力男先生（当時、丸田先生の後任として信州大学第2外科教授）を通じて丸田公雄会長（当時）に伊藤信義先生のお気持ちをお伝えした。

伊藤信義先生の御希望は、「寄付は何回かに分けて行いたい、寄付金は基金とし元金そのものには手をつけず利息を使うように、運営・用途は本会にお任せする、基金の名称には『智瑤』の文字（御母堂様の戒名紫雲院智瑤妙敏大姉の一部）を入れて欲しい」とのことであった。

1977年秋の千葉市における第10回甲状腺外科検討会の世話会において、伊藤先生のお申し出が神前世話人から報告され、さらに伊藤信義先生御自身より寄付金申し入れの経過説明があり、本会としてこのお申し入れを有り難く頂戴することに決まった。このあと、丸田会長はじめ本会事務局と伊藤信義先生との間で細部にわたる検討が行われ、また第11回世話人会でも智瑤基金の用途が討議された。

なお、元金は第12回世話人会の時点で1,300万円、その後も入金があって第14回世話人会時には2,800万円に達している。

本会の活動に対する本基金からの支援

1980年に英国のTaylor教授を招いたときの旅費・宿泊費に一部を使用した。また、第16回世話会において、翌年より甲状腺外科検討会学術集会の運営のために、（会費会計からの160万円に加えて）智瑤基金からも毎年90万円を支出することが決定された。

さらに第17回世話会において、腫瘍登録委員会に対して毎年70万円の予算が計上されることになった。この2つは以後毎年継続して支出されてきた。

腫瘍登録委員会の活動の成果は、毎年本会学術集会の抄録集の末尾に掲載されている。また1992年には、甲状腺悪性腫瘍登録委員会の委員長を長年にわたって務めてこられた江崎治夫先生を筆頭著者として英文で報告されているが、わが国における甲状腺癌の実態を日本全国の多施設のデータに基づいて明らかにした点で重要である²⁾。

さらに、第31回の当番世話人報告として国立がんセンター東病院の海老原 敏先生（甲状腺悪性腫瘍登録委員会の現委員長）がまとめられた「甲状腺悪性腫瘍全国登録症例の長期予後調査」は、厳密な予後調査に基づいてわが国における甲状腺癌の10年生存率を算出されたものとして貴重な報告である³⁾。さらに、海老原先生らは1977年から1995年までに治療された計27,795例の登録症例の詳しい解析結果を英文で報告しておられる⁴⁾。

表. 伊藤信義先生 御略歴

1920年 3月 1日	鹿児島県大島郡龍郷村秋名において出生
1937年 4月	大阪高等医学専門学校入学
1941年12月26日	同上卒業
1942年 1月 7日	医師免許証取得
1942年 1月15日	海軍軍医少尉に任じらる
1942年 3月 1日	海軍軍医学校普通科学生
1942年 5月20日	同上終了
1943年 3月15日	海軍軍医中尉に任じらる
1944年 5月 1日	海軍軍医大尉に任じらる
1946年 3月25日	復員
1946年 9月 2日	京都帝国大学医学部専修科入学
1948年11月	同上終了
1948年12月31日	文部教官(京都大学医学部助手生理学教室)に任じらる
1950年 3月	同上辞任
1951年 4月	大阪大学医学部(生理学教室)研究生となる
1952年 2月25日	京都大学より医学博士の学位授与(主論文:ソ連引揚者の体力)
1952年 9月	大阪大学医学部研究生を辞す

この間、1950年4月～1956年8月
薄病院副院長、島田病院院長等を併務

1956年 9月	大阪医科大学(外科学)研究生となる
1957年 7月	大阪医科大学研究生を辞す
1957年 7月21日	「伊藤診療所」を開業
1959年 6月 1日	同診療所を廃して、「伊藤病院」開院
1961年 3月	北野病院(麻酔科)志願医員となる
1963年 3月	北野病院志願医員を辞す
1963年 4月	関西医科大学(麻酔学教室)研究生となる
1965年 3月	関西医科大学研究生を辞す
1967年 4月26日	厚生省より麻酔科標榜許可
1985年10月6日	「サギ類の就峙行動に関する研究」に対して、日本鳥学会奨学賞を授与される
1990年 4月22日	御逝去

これらの成果は智瑤基金なくしてはきわめて困難であったと思われる。

しかしながら、昨今の低金利により予期した利息を生み出すことができなくなり、昨年度より基金からの90万円の学会開催補助費の支出は一時停止することになった。したがって、現在のところは腫瘍登録支援のみとなっている。1日も早い景気回復が望まれる。

伊藤先生の御経歴

詳細は表に示したが、1920年(大正9年)に鹿児島県でお生まれになり、大阪高等医学専門学校(現在の大阪医科大学)卒業後、海軍軍医学校普通科学生を経て、終戦時には海軍軍医大尉。1946年3月復員。その後、京都帝国大学医学部専修科において学ばれ、1948年から2年余にわたって文部教官(京都大学医学部生理学教室助手)に任じられた。さらに大阪大学医学部生理学教室研究生として約1年半研鑽をつまね、1952年2月25日に「主論文:ソ連引揚者の体力」により京都大学から医学博士の学位を授与された。

この間、1950年～1956年にかけて薄(ススキ)病院副院長・島田病院院長などを歴任され、臨床経験を積まれた。その上1956年9月～1957年7月の間、大阪医科大学外科学教室の研究生をされ臨床医としての腕を磨かれた後、1957年7月に「伊藤診療所」を開業された。

1959年6月、伊藤診療所を廃して、大阪市旭区に「伊藤病院」を開設。地域住民の健康のために日夜多忙な日々を送られる傍ら、1961年3月より2年間北野病院麻酔科の志願医員、続いて1963年4月より2年間関西医科大学麻酔学教室の研究生として研修を積み、1967年4月には麻酔科標榜医の許可を得られた。

この御経歴から見ても、「何事に対しても決して手を抜かず全力を挙げて物事に当たる」という伊藤信義先生の真面目な御性格が明らかである。

1980年頃から肝炎のため体調不良を訴えておられたが、治療を続けながら院長職に従事。1990年4月22日肝細胞癌のために御逝去。

因みに奥様(伊藤房子先生)は信義先生の後を継いで院長職を数年間務めて来られ、また現在でも内科医として伊藤病院で診療に従事しておられる。御長男(伊藤裕章先生)は大阪大学医学部卒業後現在阪大内科(正式には大阪大学大学院分子病態内科学講座)の文部教官として研究・臨床の両面で活躍中である。伊藤病院の現院長は御次男(伊藤寿章先生・川崎医科大学卒業後、阪大第2外科および関連病院にて修練)が務められている。

余技も一流

伊藤信義先生は御多忙な日常業務にもかかわらず医学とは直接関係のない分野においても多彩な才能を発揮された。

その1つは写真であり、特に「シラサギ」の生態を望



図3. 伊藤先生から頂いた白鷺の写真

遠レンズでとらえた写真は見事なものである(図3)。その成果は立派な写真集「シラサギ White Egret」として山と溪谷社から出版されており⁵⁾、さらにこの写真集は翻訳されてアメリカおよびイタリアにおいても発刊されている^{6,7)}。これらの豊富な観察経験をもとに「えほん・生物のせかいシラサギ」も出版されているが、この本の文章も先生御自身で執筆しておられる⁸⁾。

ご存じのように動物写真は非常に難しい。離れたところから長時間にわたって観察をつづけ、シャッターチャンスを逃さず、被写界深度が浅くまたカメラぶれが起こりやすい超望遠レンズで撮らねばならない。しかも四季それぞれにシラサギの生息地に出かけて泊まり込みで撮影を続けるには並々ならぬ努力が必要であったに違いない。(写真集⁵⁾の「あとがき」参照。先生の撮影されたシラサギの写真は10万枚を超えたとのことである。)

しかも伊藤先生はこの観察を通じてシラサギの生態に関する研究を進められ、日本鳥学会にも所属されて数編の学術論文を発表しておられる⁹⁻¹³⁾。「サギ類の就群行動に関する研究」に対して1985年度に日本鳥学会奨学賞を受けておられることから先生の鳥類研究の価値が明らかである。

まとめ

以上から伊藤信義先生のお人柄の一端を御理解いただけたものと思う。すなわち、非常に真面目で物事を徹底的に突き詰めていかれる姿勢が顕著にあらわれている。それだけに「自身が医師であるにもかかわらず、母親の疾患を見逃し、治療のタイミングを誤っ

た」ことに、極めて強い自責の念に駆られたに違いない。

先生からのお手紙に「—母を失って68日、悲しさよりも自らの無知・盲目により救われるべき命を失った、母を殺したも同然の悔しさの中から、やはり明らかにすべきは明らかにして、これからの人生を如何に送るかの資とさせていただき、また医学生たる2子に父の不明を明らかにして、医師として歩む上の覚悟を銘記させたい念願から御教示をお願いする次第でございます。」とあるが、このお言葉はわれわれすべてが心すべき至言であろう。

21世紀には、分子生物学に基づいた診療がますます普及するであろうが、医師たる者はすべて最新の医療情報に常に目を注いで時代の進歩に後れないように心がけるとともに、自身の診療の結果について常に謙虚に反省を加え明日の診療に活かすことが必要であろう。

最後に「紫雲院智誦妙敏大姉」ならびに「故伊藤信義先生」の御冥福を謹んでお祈り致します。

謝辞

この文章をまとめるにあたっては、御遺族の皆様をはじめ、智誦基金設立当時の事情を知っておられる本会世話人の一部の方々、飯田会長ならびに本研究会事務局に大変お世話になりました。また第33回研究会当番世話人中尾先生および大阪警察病院のスタッフの皆様には資料の準備・展示について全面的な御協力を頂きました。心より深く感謝いたします。

【文 献】

- 1) 甲状腺癌の予後をめぐって (質問：大阪1生, 回答：牧内正夫) 日本医事新報 (No.2797) 141, 1977
 - 2) Ezaki H, et al : Analysis of thyroid carcinoma based on material registered in Japan during 1977-1986 with special reference to predominance of papillary type. *Cancer*, 70 : 808-14, 1992
 - 3) 海老原 敏 : 第31回甲状腺外科研究会当番世話人報告「甲状腺悪性腫瘍全国登録症例の長期予後調査」資料. 1998
 - 4) Ebihara S & Saikawa M : Survey and analysis of thyroid carcinoma by the Japanese Society of Thyroid Surgery. *Thyroidol Clin Exp*, 10 : 89-95, 1998
 - 5) 伊藤信義 : 写真集「シラサギ White Egret」. 山と溪谷社, 東京, 1986
 - 6) Itoh S : "The White Egret" Chronicle Books, San Francisco, California, USA, 1988
 - 7) Itoh S : "Aironi bianchi" Priuri & Verlucca, editori., Torino, Italy, 1989
 - 8) 伊藤信義 : えほん・生物のせかい シラサギ. 童心社, 東京, 1985
 - 9) 伊藤信義 : コサギの就峙前集合. *Tori*, 33 : 13-28, 1984
 - 10) 伊藤信義 : コサギの冬峙における就・離峙行動と気象要因. *Tori*, 33 : 51-65, 1984
 - 11) 伊藤信義 : 迷行してきたクロトキの就・離峙行動. *Tori*, 34 : 18-19, 1985
 - 12) 伊藤信義 : 日本におけるクロトキの生息記録. *Tori*, 34 : 51-65, 127-143, 1986
 - 13) Itoh S : Geographical variation of the plumage polymorphism in the Eastern Reef Heron (*Egretta sacra*). *The Condor*, 93 : 383-389, 1991
-